

第八章 民 俗

第一節 衣、食、住

一、衣

仕事着 仕事着やふだん着は、手づくりで、木綿、麻を機はたで織り、染め、仕立てられたもので、くらしに密着した実用的なものであり、土地の匂いがあった。

仕事着は、田畑や山仕事のときに着たものである。縄ない、朝の草刈り、養蚕、田植え、畑仕事など、仕事の内容で仕事着も少しずつ異っていた。

手織り木綿の、寒さ暑さに耐える丈夫なものを着用した。同じ野良着でも、立ち居や身体の屈伸のはげしい野外での仕事着には、上衣と下衣に分かれたものが使いやすかったのである。帯は木綿を使っていたが、男は縄を締めている人もあった。

第八章 民 俗
農村部では、夏はハンギリ、冬は長ハンギリを着け、上からソデナシを着た人も多かった。女は腰巻、前掛、脚絆をつけ、かぶりものは、手ぬぐいでアネサンかぶりをしていた。また暑さ寒さを防ぐにはミノ、ア



男の仕事着
(新潟県)

女の仕事着
(新潟県)



カブリモノ

ミガサ、手には手甲(テガワ)、手袋などが使われていた。袖の形も、広い袖や、半袖があり、ハンギリ、トッポと呼ばれるものは、筒袖になっていた。

昔はフダン着と仕事着は、ほとんど同じものを用いていた。それらは地味な紺系統が多く、袖はつつ袖(ネジテッポウ)で冬に使用した。

下半身に着るものとしては、モモヒキが普通で、畑仕事もハンテンにモモヒキ、足には脚絆、女性用は筒袖の着物に、ユモジ(コシマキ)であった。裾のからげも、男は高尻からげ、女は裏返しにして、ユモジが少し見える程度にからげていた。男は、夏はさらしや天竺木綿で作った

パッチ(紺色の短かいズボン)または六尺ふんどし(六尺ヘコ)のままの人もいた。

下着として上体に着る肌着は、男女ともに夏は木綿(さらし)冬はネルであった。男物は袖口や首までボタンがつき、女物にはボタンはなく、紐でしめるようになっており、胸はあいたようになっていた。

雨具は、パッチョガサといって、竹の皮と竹ひごでつくり、ミノはカヤ、シユロの皮、わら、イ草で編んで油紙を

ぬいつけたものなどを、着けていた。普通、よそ行きには番傘、女性は蛇の目傘を用いていた。

フダン着 忙しい時節には、一日中仕事着ですごす場合が多かったが、フダン着は農閑期や雨で外の仕事が出来なくて、家の中でですごすときの着物であった。衣類は長い間、麻布が使われ、近世に木綿が一般に広まった。夏は木綿のひとえやゆかた、麻のカタビラ、寒いときには綿入れ、ドテラ、(タンゼン)、チャンチャンコ袖なしを身につけた。子どもを背負うときは、ネンネコといって綿入れの厚いタンゼンを用いた。

晴れ着と礼服 われわれの生活の中には、ハレの日と常の生活があった。

晴れ着は礼装、盛装のことで、人々は生涯には少なくとも、宮参り、結婚式、七五三などの祝いごとや葬式などに身につけた。

お客やよそ行きのときに着る着物をヨソイキといっていた。絹を縞模様きに織ったり、白生地きに織つたのを、染め物屋に染めてもらうなどして、仕立てた。大正期になって反物を買う人も出てきた。

その他 かやは、近年になってから、麻や木綿の蚊帳がが使われるようになった。

ふとんは、暖かですわらかい寝具の庶民化は、比較的近年のことである。木綿布団の普及以前には、わらふとん、板じきの上にむしろやござをしいて寝た。仕事着をひっかけて寝ていたのが、綿入れのかけふとんに変わり始めたのも、江戸時代からであった。煎餅ふとんが厚いふとんになったのは、昭和に入ってからである。

枕は、ツゲ、朴は、桐などを用いた木枕が多かった。布の枕の中にはそばがらや、茶がらを入れた枕を使うと安眠できるといわれていた。

はきものは、ぞうり、足中、ゲタ、ワラジ、セツタ、高ゲタ、駒下駄などがあった。

二、食

食事 一日の食事が三回になったのは、江戸の町では元禄期といわれており、長洲地方では、それよりかなり後ではなからうか。三度の食事に米の飯を食べたのは明治以降でも一部の裕福な家であり、大方の家おおかたでは麦飯、粟飯、からいもが主であった。唯このような中でも神棚、仏壇にあげる「オブッパン」には米粒の多いところをついだ。米の飯だけ食べるようになったのは昭和もつい最近のことである。

朝食の副食は「みそ汁」であるが、「みそ」も「しょうゆ」も、長洲の商家、漁師の家を除きほとんど自家製であった。今日では「しょうゆ」をつくる家はなくなつたが、「みそ」はまだ多くつくられている。昼食はからいもなどの代用食で済ますところが多かつたようである。

夕食は量、質共に一日の中で最もよいものを食べる習慣は昔からあつたようであるが、副食の蛋白質源は魚であり、特に長洲、上沖洲の海岸地区では特別な時を除き毎日のように魚、貝などを食べた。

祝、祭食品 お祝いの時につくるものに赤飯があり、節句は勿論、子供の誕生日にもつくられた。赤飯は餅米と小豆あずきでつくり、普通の米に小豆を入れて炊いたものは、アズキメシとよんでいた。

また、五月の節句には「チマキ」、三月の節句には「ひしもち」というように決まつたものをつくることがあつた。また、長洲の的ばかいには細長いダンゴにアンコをまいたものがつくられた。

祭りにはこうじをねかせてアマザケをつくり、それで客をもてなした。

ザシキは主に客間や養蚕室として使用された。割合に明かるい日当りのよい部屋で、仏間、床、押入れがあり戸主夫婦の寝所となっていた。ザシキの外には縁があった。

オマエは八畳から六畳位の部屋が多く、高い場所に神棚がまつてあり、ここは家族の寝所になっていた。ヘヤは八畳間が多く、長持ち、たんす、その他の道具のおき場となり、若夫婦の寝所にもなっていた。

茶の間は六畳間が多く、平素食事をする場所、食事に使う器や食器を入れる作りつけの戸棚があった。家族の多いところでは、寝所にも使われていた。

カマヤは炊事場で洗面もした。洗面は脚のついた木の桶が使われていた。また土クドと大釜のクドもあった。みそ、しょう油ガメや、つけ物樽、炊事用具などがおかれていた。

ニワヤは土間のことで物置きや作業場となり、藁打ちするための石が片隅にすえてあった。また俵あみ、ムシロ作り、ネコブク、コイドリ（畚）なども、ニワヤで作った。穀物は、みんな俵詰めにし、数段積み重ねてニワヤの隅に保管した。トタン製の収納缶が使用されるようになったのは、ごく最近である。ニワヤの上は竹を編んで、ムシロをしき、屋根裏まで薪を積んで炊事に使用していた。

漁師の家　　漁村は一般的にせまい土地に家がたて込んでいるところが多いが長洲も例外ではない。

家はカヤぶきであるが、風が当たたらぬようにできるだけ低く造ってあり、庭もせまかった。

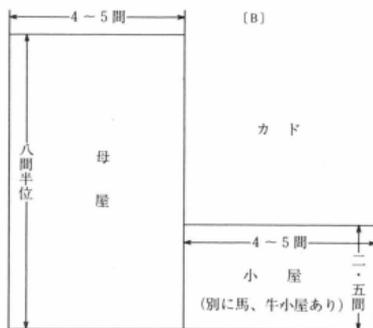
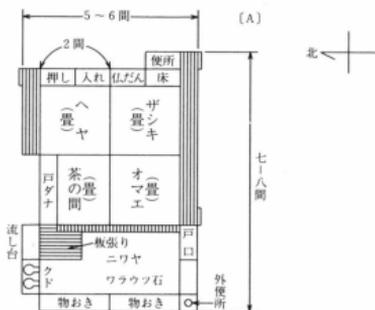
一般的な漁師の家は、図(1)のような間どりが多かった。

土間は表から裏に通り抜けられるようになっており、道具の大きいものは土間の上につるしていた。

狭い家であるため、工夫がこらしてあり表の戸は次のようになっていた。

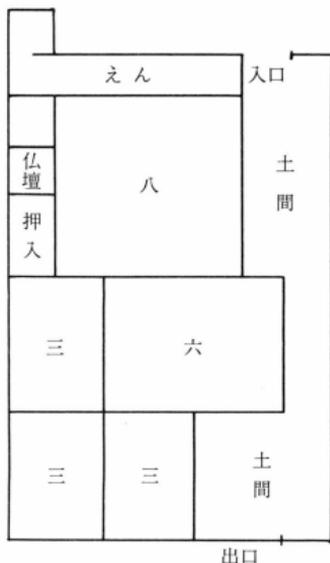


〔一般的な農家の間取りと名称〕

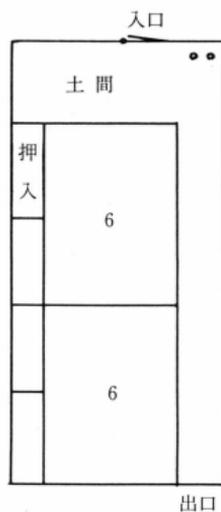


〔永方、北本家の間取り〕

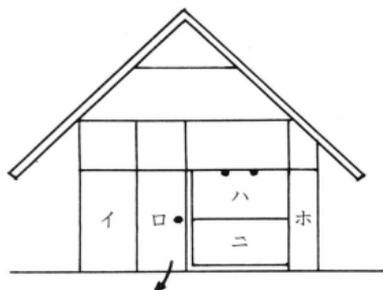




網元の家



一般の家



表戸

(イ)は壁になっている

(ロ)は開き戸であり外側に開く様になっている

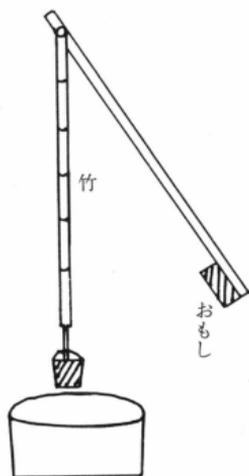
(ハ)は家の中の天井にもち上げてかける棒になっている

(ニ)は柱に細工をして上の方にそのまゝ引き抜く様にしてある

即ち左図の様に柱に戸の入るだけのミノを掘り込んである

(ホ)の所は幹下を利用(家の中ではあるけれども)佛間、押入れ等を作っている





「はねつるべ」



夏の暑い夜は、ゴザと木枕をもって船に寝泊りする人もいたが、女・子供は家の前にバンコ（オキザ）を出し、近所の人とお茶を飲み交わし夕涼みのひとときを過した。

長洲町に電灯が最初についたのは、大正時代であった。殆どの家では、ことほしや石油ランプが使われていた。これは吊り下げるものと、据え置くものとの二通りがあり、ちようちゃんは外出用であった。

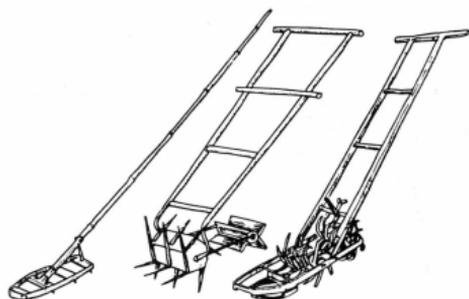
井戸は最初はつるべ井戸であったが、後でだんだんとポンプに変っていた。地下水を汲み上げる管は、殆ど竹（孟宗竹）であった。山つきでは湧き水をそのまま管でとりよせ炊事用として使っていた。家庭水道がつき便利になったのは、ごく最近のことである。

第二節 生産

一、田の作物

苗代田は、水利のよい田が決められており、ノドコ（苗床）という。苗代田は五月中旬ごろ、水を入れ、

マガを牛馬に引かせ、地ならしをし、畠土をどろどろに碎いた。四、五日前から水に浸した種子を、うねに蒔き、上から焚き灰や堆肥をばらまいた。雀や小鳥が食べないように、周囲にはカカシや鳴子を立て、かすみ網などを張っていた。水はなるべく少なめに入れて、発芽しやすいようにした。農家にとっては六月中旬から田植えの準備として、水田の周囲の木々や雑草を刈り、水を入れ、あぜぬりをして、水が外に洩れないように手だてをした。



田植えをする前には、シロカキとか、ウエシロといって、馬鍬で地ならしをした。これは普通男の仕事であった。近くの親戚同士や、近所の二、三軒が一緒になって田植えをした。家族数、耕作地の面積の多少にかかわらず、全部の田植えが終るまで協同作業をやっていた。これを「もや仕事」といった。

田植えは、最初は、目くら植えされていたが、明治になってから今のよりに改良されたのである。赤い布のついた田植え綱を使ったり、三株ないし、七株に小割した赤い布のついた竹ざおを使用した。三株植えは一人であり、七株植えは二人で後すざりして植えた。

追肥としての科学肥料は僅かばかりで、人糞尿が主であった。

害虫駆除では、タカッポ（竹筒）に石油を入れ、それを少しずつ水面上に落したあと竹の先に藁をまきつけて作ったエザワラで水面をかきまぜ、竹筐で虫を払い落して殺していた。これを「油さし」といった。

中耕と除草にはガンヅメを使った。最初は手打ちガンヅメ、その後ガンヅメは輪一つで、除草のための歯が鋭くとがっていた。その後にできたガンヅメは二輪で、除草歯も円みをおびてきた。これを「手押しガンヅメ」、「オセオセ」とよんでいた。

収穫は十月中旬からはじまる。ノコガマや刈りカマで刈り、そのまま田の中に地干していた。湿地ではカケ干しといって竹や木を組んで稲を束にして乾燥していた。ある程度乾いたところで、センバで脱穀し、猫伏で三、四日位干して、カマスに入れて保管し、唐箕とうみで選別し、粃摺りもみすをして玄米とした。

稲こぎ千歯は、歯が板状に尖ったもので、台を足で踏み、手で稲束をつかみ、歯にかけてモミをおとしていた。後で足踏み脱穀機、動力脱穀機が普及してきた。

今日では化学肥料が使われ、防虫害にも農薬が使われている。粃摺り、乾燥まですべて機械化されるようになり、昔の面影は全く見当らなくなった。

二、畑の作物

畑の大部分は桑畑であった。それだけ養蚕が盛んだったことを示すものである。その他は麦、粟、さつまいも、ソバ、野稲のいね（陸稲）などの穀物や、タバコ、菜種などが作られていた。

麦作は稲の収穫が済んでから行われた。畑を耕した後、巾一米位のうねを作り、そこに種子を蒔いた。種子蒔きの後は堆肥をかけ、足で踏んでいた。かぶせ土のことをツチゴエともいった。麦が発芽した後には、数週間おいて、数回麦踏みをした。その間、溝あげ、土入れなどをして、麦の「分けつ」をうながした。

六栄地区など、山間部のわき水の多い湿地では、深さ一米、あるいはもっと深い溝を掘って、竹や雑木を入れ、排水をうながし麦を作っていた。このやり方を暗渠排水といった。

麦は、六月初旬刈り取り、三、四日干して小屋に運び、千歯で脱穀した。そしてネコブクの上に干して乾燥させた。これをブリコでたたき、唐箕にかけて、選別し、カマスに入れて保管した。

さつまいもは、三月初旬ごろ、いも床といつて温床枠を作り、推肥や糞を入れて、そこにさつまいも種をふせた。いもの芽が三十cm—四十cm位に伸びたところで、麦作のあとの畑にうねを作つて植えた。途中で雑草をとつたり、溝あげをしたり、うまやごえ（牛馬のしきわら）などを追肥としてやつた。つら返しといつて、いもづらをうねごとに返していた。収穫は十月下旬から十一月にかけて、霜の降りる以前に行われていた。収穫したさつまいもは、日当りのよいところや、小屋や母屋の地下に貯蔵した。その上に糞がらや糞をのせて冬の寒さを防いだ。この貯蔵するところを「カライモガマ」といった。農家には必ずカライモガマが備えつけてあった。

タバコ栽培について 長洲町においてタバコが栽培されるようになったのは、一九一九年（大正八年）ごろ、鷺巣地区の石井進さん外、五、六名で作付けがはじめられた。その後、鷺巣、折地、赤崎地区で作付が行われ、その後栽培をする農家は、増減をくり返し、現在ではおよそ二十五戸位の農家で作付けされている。

三、養 蚕

長洲町で養蚕がいつごろから行われたかは、はっきりしていないが、明治から大正、昭和の初めにかけて

盛んに行われるようになった。これは政府の奨励策によるものである。以前は、殆どの農家が養蚕を行っていたが、現在は見受けられない。玉名郡市内では、菊水町など一部の農家で養蚕を行っている。

従って、畑は（特に六栄、腹赤、清里地区の台地）ほとんど桑畑であったといつてよい。

農家では卵をふ化する場合には、南向きの一番暖かいザシキが使われていた。卵がふ化し幼虫へ成長するに従って、蚕棚（数段組立てられた棚）に移される。飼料としては、桑の葉を幼虫の成長過程に従って一日に数回与えられる。幼虫が桑の葉を食べているときは、シンシンと、丁度小雨が降っているような音を出す。その間七島で編んだ網をしき、蚕滓の取り除きに使われていた。これは蚕を他のバラに移すときに使われていたものである。そして、幼虫が上簇すると、ふつう「アガリ」といって別の場所へ移した。そこには「マブシ」（藁で編んだもの）が備えつけられていた。幼虫はまゆの中でさなぎになる。

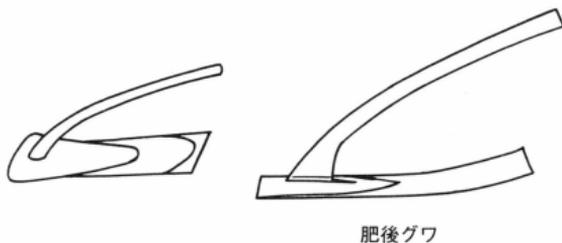
マブシの中で作られたまゆは、一つ一つ丁寧に取り除かれ、外側についた不純物を取り除き、きれいなまゆにして蚕籠に入れ出荷した。まゆは白色と黄色であった。

養蚕はふつう春ご、夏ご、秋ご、晩秋蚕といつて年四回が普通であった。養蚕には多くの労働力を一度に要するので、家族全員、老人から子どもまで手伝わなければならなかった。

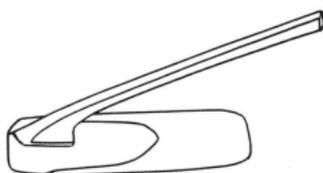
農家においては、その当時、養蚕は大事な現金収入の一つであった。

戦前の輸出の中で、養蚕による生糸が、明治以後昭和の初期まで輸出の第一位であった。

四、田畑の農具



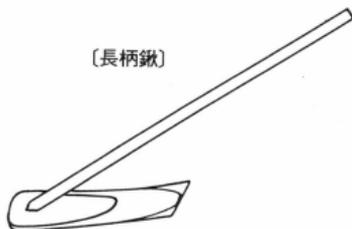
〔手打ガンツメ〕



〔クレワリ(塊割り)〕



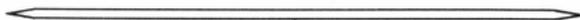
〔長柄鍬〕



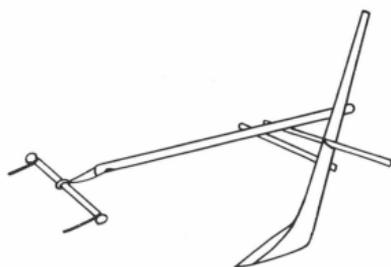
〔山芋堀り〕



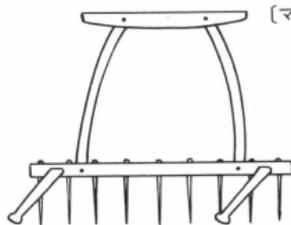
〔ヤマコ〕



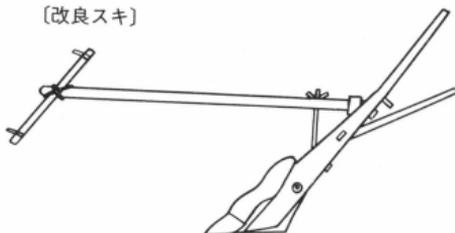
〔スキ〕



〔マガ〕



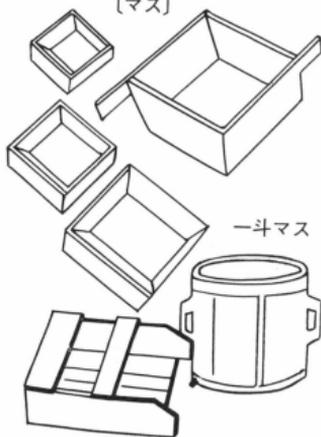
〔改良スキ〕



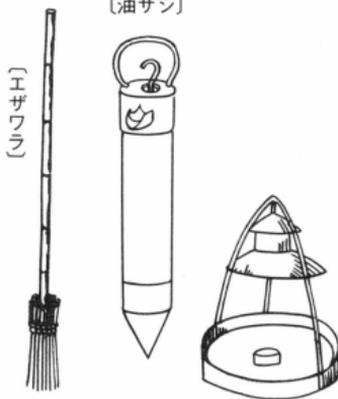
◎写真資料

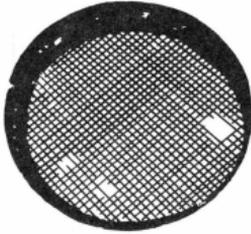
- 牛島盛光氏
 ┌ 熊本の民具24
- └ 熊本の民俗12
- 高木誠治氏

〔マス〕



〔油サシ〕





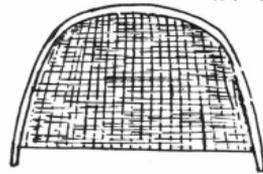
(アワドオシ)



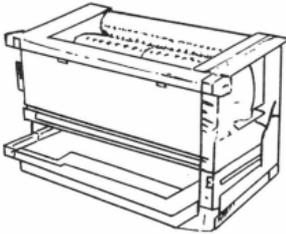
ネコボク



(万石)



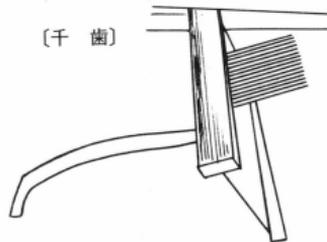
(箕み)



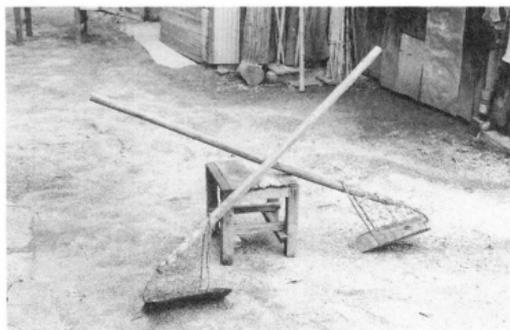
(足踏み脱穀機)



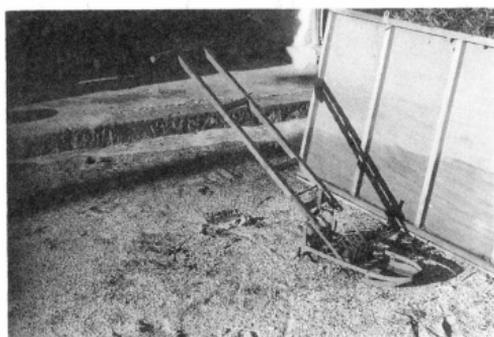
(唐箕)



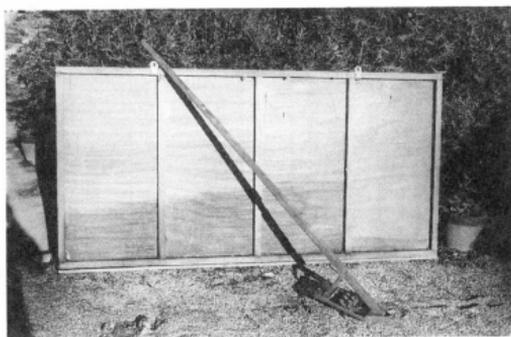
(千歯)



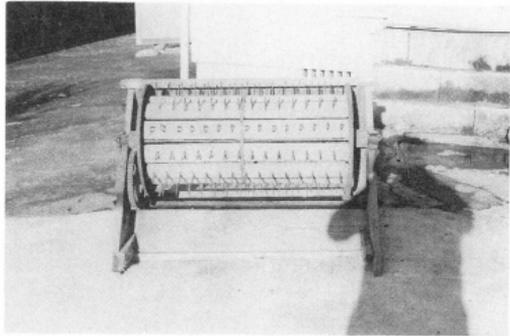
(麦の土入れクワ)



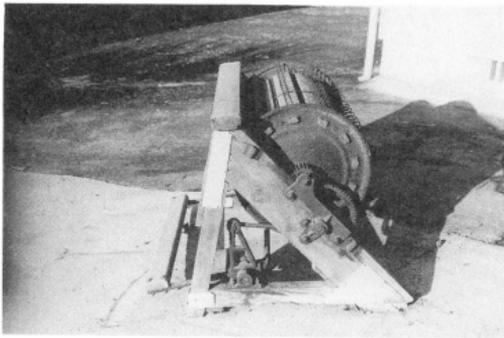
(ガンヅメ)



(オセオセ)



(足踏脱穀機)



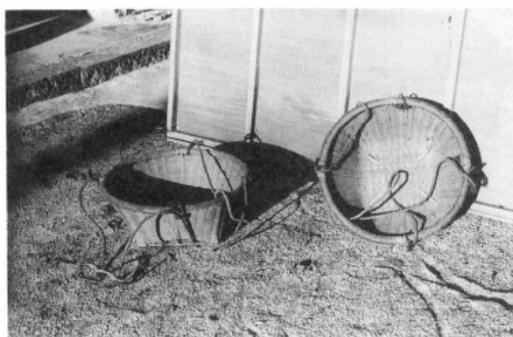
(足踏脱穀機)



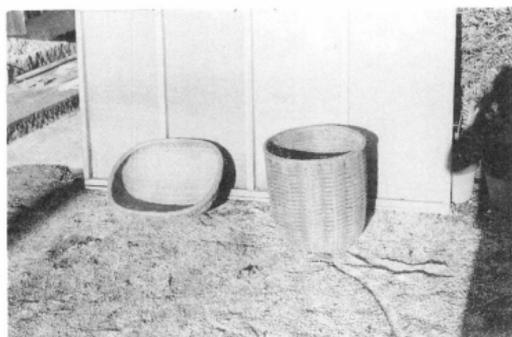
(オケ)



(ツルベ用の水くみオケ)



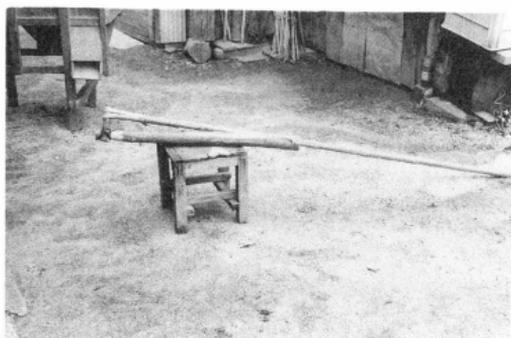
(ザ ル)



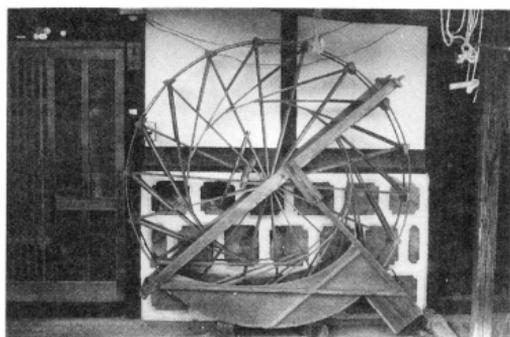
(ショウケ(左)クワテボ(右))



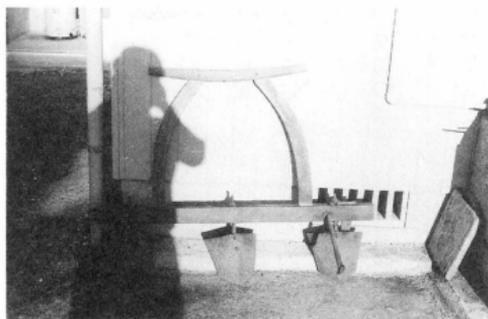
(ワラヅツ)



(ブ リ コ)



(水 車)



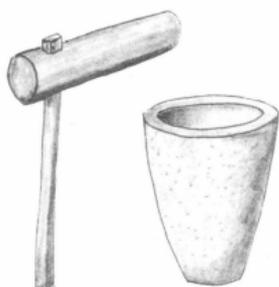
(ヤルカン)



(木 臼)



(石 臼)



(キネ)

五、漁

撈ろう

当長洲町は、南西を有明海に面し、古くから生活の中に海と深いかわりが見られる。長洲の人々にとつても、海から蛋白源としての魚介類を捕獲することは、生命維持のためにも不可欠のものであった。アンコウ網、一本釣漁が多かったが外に次のような漁撈も行なわれていた。

(一) 漁法

アンコウ網 長洲独特の漁網で「アンコウ」の形に似ているのでこの名がある。(明治の項参照)

エビ流し網(源式) 三枚網ともいう。巾一ひろ、長さ十二ひろのものを十四枚つなぎ、網の両端に浮きをつける。夜間はその両端に灯をつけてとる漁である。源式網といって投網の袋の大きなものをつけて、大きなエビをとっていた。

タコつぼ漁 タコつぼにひもをつけて、海の中に入れてタコをとる漁である。ふつうタコつぼは土どがめを使う。イイダコは小さなかめ(素焼のもの)と赤貝を使ってとる方法があった。

イカかご漁 折りたたみになっていてかごを海中に入れてとる漁である。そのかごの中には、小さな魚やタコなど何でも入るので通称「バカカゴ」ともいっている。

スキ流し網 巾、約一、四米のものを、六ひろから八ひろ位の長さの網の両端に、浮子をつけて流し網にする。夜は灯をつけておく。

クツゾコかし網 碇いかりをつけた網の長さは二十ひろ、これをふつう十八把使う。一反ごとに潮の流れに沿って網を入れ、潮ごとに網をあげて採る漁である。

サンカク網 三角に作った網を、竹に結んでアミをとる方法である。

セガシ網 網の高さは低く、小潮のときに漁をする。クチゾコ、コチ、メダカカレイなどがよく入る。

カニ網（通称ガネ網） 網の目は大きく、ワタリガニを専門にとっている。六月から八月すぎまでが主な漁期となっている。

ヒラ流し網 コンクリートの重しのついた網を海中に入れておく、舟は網に沿って潮の流れについていく。

アナゴかご 黒い筒にえさとしてカニの卵を入れる。両端に碇をつけて海中に流しておく、そして、二、三日たってから引き上げる。

トツガシ網 大潮のときに出漁するもので、半日ずつ、網を海中に入れる。主にタイラガニなどがとれる。

トバセ 昔の地引網で、網の中から外へとび出す漁（ボラ、シクチ、クロメなど）を網の外で、二人で別の網を引っ張って採る漁である。

持ちあみ 両端に二本の竹棹を使い三角形にして、その間に網を張り、前へおしていき、海底の魚（カレー、エビ、クチゾコ、ガネなど）を採る漁である。

サデ 持ちあみ漁と同じ

地引網 船から網を入れて、両端から十二人位で引つ張つて採る漁である。

タテ切り タテホシ網のことで、潮がひいているとき、四米位の竹を十五米間隔で百五十本位、海の中になたてて網を張る。渚から円形に網を張るが、円の中心から渚までの距離は四百米位で、網の長さは千米から千五百米位である。

採れる魚介類としては、次のようなものがある。

• その一

スズキ、メダカカレイ、メバル、サヨリ、アナゴ、ウナギ、ハゼ、ハイ、ハトエイ、アカクチ、シログチ、ヒラ、アラガブ（ガラカブ）、カレイ、ケメ、アカダイ、イトヨリ、クロダイ、ヒラメ、ハコオコゼ、メゴチ、ハクラ、ボラ、オコゼ、シクチ、モッキョ、アカメ、クロコチ、シロコチ、クロメ、アイナメ、シイバ、エツ、エソ、カワハギ、コノシロ、セイゴ、ハダラ、カタクチイワシ、トラハゼ、キス、クサフグ、トラフグ、サバフグ、イシダイ、ツウゾウ、クツゾコ、サワラ、マナガタ、タチウオ、エイ、キヤアメ

• その二

ハマグリ、アサリ、マテガイ、キヤッポ、ツベタ、コウガイ、ウバガイ、アカガイ、タコ、イカ、イワタコ、イイダコ、カズタコ、アシナガダコ、ドイカ、マイカ、カツツイカ、カニ、イシガニ、タイラガニ、シヤク、アミ、シラエビ、ガタエビ、クルマエビ、トンキユエビ

漁期としてシュンに採れるもの

春、ススキ、イカ、カレイ

夏、カニ、エビ（車エビ）

秋、エビ、グチ

冬、クツゾコ、ススキ

(二) 出漁しない日（禁忌、伝承）

家庭に不幸があつたときは、三日間位出漁しない。

お盆の八月十六日には絶対に出漁しない慣習がある。その日は地獄の釜のふたが開くので出漁しないといわれている。もし、その日に出漁すると、事故にあつたり、家庭に不幸がおこるといい伝えられている。

天気予報　漁師にとって海上で操業するには、風や雲の動きを素早く察知することが、重要な条件であつた。

コチカゼ　東風のことである。冬季に夜明けから吹くが、天気はだんだんよくなつてくるといわれている。

ハエンカゼ　南風のことである。三月ごろから吹き出し風をともなつて雨も降る。

アナゼカゼ　北西の風ともいう。台風の時期にアナゼカゼが吹けば、その前ぶれといわれている。

キタコチ　北東の風のことである。昼間吹いて夜になればやむ。

オキバエ　南西の風のことである。

オシアナ　南東の風のことである。台風時期に吹いてくる。風としては一番強い風である。

その他 島原夕立は降るけれども、小岱山夕立は降らない。

(三) 信仰、儀礼について

フナダマサマ（船霊様）入れ 新造船ができるとフナダマサマ入れがある。女の神様で次のような慣習がある。

- 一、未婚の女性の淫毛を入れる。
 - 二、柳の木を将棋形に造り、天一、地六、体五、荷二と書き込む。
 - 三、錢十三文を入れる。
 - 四、穴を掘る場所は、帆柱の建つ根元、又はミヨシ
 - 五、穴の大きさは三寸×二寸二分、深さは適当に掘る。
 - 六、穴に入れた後にふたをする。
 - 七、漁船は、大漁、不漁はフナダマサマで決まるとされ、不漁ばかり続くと、入れ替えさせられることがある。
- （高木誠治氏調査資料）

船おろしの祝について 船主と船職人は、昔は紋付、袴で盛装し、酒一升、米一升、魚（鯛又は鱒）二匹をモロブタにのせ供えた。近所、親戚からは、お祝に大漁旗をもらう。

当日は、フナダマサマに酒と刺身、ごはんを供える。

長洲の船は、昔は天草郡登立の造船所や、八代の造船場で造られていたが、今は島原で造られており、こ

の船が漁師に渡されると、「船おろしの行事」が盛大に行われた。満船飾を施した船に旗を贈った人々を招待し、大人、子供がのり組み、洲崎大明神の沖に出て神に大漁を祈った。また、船上では船ばたをすくら（すいた板）で叩き、船の強さを見せ、左右にがぶり、四王子宮沖まで同じことをくり返す。そして、見物人の方に餅やみかんを投げた。

(四) 船上用具

ウオオケ 魚を入れる桶である。大きいものは直径が一メートルもあり、下に碇をつけて浮木の役目にも使用された。

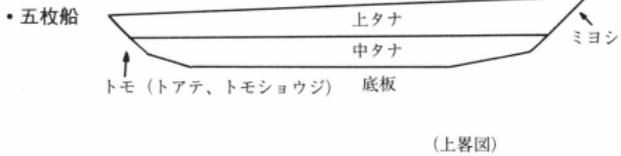
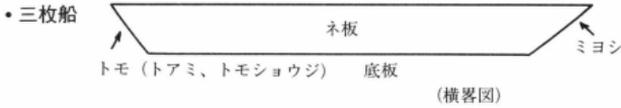
カギ道具 網や延網を海底で引っかけてあげる道具であとは、針金を曲げてカギ型に作り、それに鉛をつけた。

(五) 小型木造船について

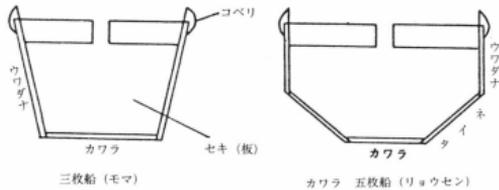
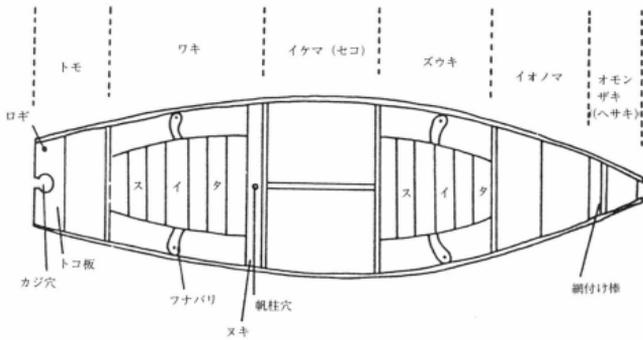
三枚船 平底で安定感があり、渡し船などに使用されるが、急いで漕ぐことはできない。のり船は三枚船である。

五枚船 この船は揺れるが、漁船として利用され、急いで漕ぐことができる。あんこう船は五枚船であった。

小型木造船の名稱



〔和船の部分名称〕



〔和船断面図〕 (八代の民俗より)

第三節 社会生活

一、民間信仰

今日、普通一般に神とよばれているものは、自然の脅威やくらしなど、さまざまな部面を通じて、われわれ人間とかかわりのあるものである。例えば、氏神というものは、氏子という特定の祭祀者にささえられて、今日まで受けつがれている。

祖先を祀ることは、民間信仰の中核となっている。ただ先祖といっても、そこには始祖から最近の死者まで、さまざまな神霊を含んでいる。そして多くは、身近かな祖父父母や曾祖父父母を通じて、先祖を感じるものである。正月やお盆には、神社や寺や墓にお参りすることを忘れない。これらは民間信仰として、ずっと今日まで続いている。

その他、戸口には火災、難病、盗難除けのため、神札を貼りつけている家を見かけることがある。屋内にもさまざまな神が祀られている。各戸には神棚があつて、通常、オマエや茶の間などの鴨居の上に棚を設けて、祠堂を安置し、各地の神社あるいは、氏神の神札を納めている。また家によっては、恵比須さん、大黒さんといった神も同一祀されている。神札としては「天照皇大神」の札が多い。

第八章 民俗
仏壇は、先祖や近親者の御霊のしずまる場所として、位牌を安置したところであり、その形態は、それぞ

れの宗派により若干の違いがある。

年忌供養としては、死後七日ごとに供養し、初七日、四十九日、一周忌、三年忌、以下七年、十三年、十七年、三十三年までで、これは各戸により宗派によって異っている。そして最終の年忌を「弔い上げ」と称し、個々の仏に対する供養を終える。

神道では、十日祭、二十日祭、五十日祭、一年祭、五年祭、十年祭がある。

神棚や仏壇には、毎日欠かさず、神さんには「おはつお」、仏さんには「ごぶつばん」とお茶をあげる。神棚には「ハナンシン」、仏壇には、季節の花を供えている。家族の誕生日、入学、卒業、七五三、結婚、その他お祝いごとや、祖先の年忌には、ローソクを灯して家族全員がおまいりする。

下平原地区の観音さんの信仰 下平原地区には、九月十七日に「観音さん祭り」が行われている。下平原をさらに、上と下に分けて、座元はくじで決める。上と下で座元は交互に当たるようになっていて。座元になった家は、ごちそうをつくって待っている。人々は座元の家へ、「観音さんのおかげじゃ」、「観音さんのおかげじゃ」と、口々にとなえながら集まって行く。座元の家は一年間、その観音さんを祀まつって、毎日、「ごぶつばん」とお茶を供えて、家内安全を祈願する。そして、その地区のお嫁さんがお産をするときは、その観音さんが安置されている家へ行って、安産を祈願する。

沖洲地区の地藏さんの信仰 年に一回「地藏さん祭り」といって、五月の祭日に行われている。このときは地藏さんが安置されている場所へ行って、坊さんを招きお経をあげてもらって子どもたちの安全を祈願する。歯が痛むときは、このお地藏さんに参ると、痛みが治るといふ言い伝えがある。今日では近所の人々

が、さかきや季節の花、胸当てを供えてお詣りしている。

二、農民の労働慣行

長洲町旧農村部、六栄地区、腹赤地区、清里地区などでは、建築、麦藁^{むぎわら}屋根のふき替えや、田植えなどの農作業においては、一度に沢山の人手を要するので、労働交換や、「カセ」などが行われていた。

「テマガエ」は労働交換のことである。農作業においては、特に牛や馬がいらない家は、田畑を耕すのに、牛馬を持っている家の人にたのむより仕方がなかった。その場合には、耕してもらう代わりに、代金としてお金を支払うこともあったが、お金を支払わないときは、田植えや収穫期など人手を要するとき、労働のお返しをすることが多かった。田植えのときなどには、どちらにも牛馬がいても、一緒になって仕事をするこゝとがあった。当時はこのことを方言で「モヤイ仕事」といった。

「カセ」とは手伝ってもらうだけで、労働交換をしないものをいう。近所や親戚の間で、収穫や植え付けが遅れているとき、建築、屋根のふき替えなどのときは、雇われなくとも、自分から進んでカセに行くのが慣行であった。カセして貰った家は、加勢した家が人手を要するときは、カセのお返しといって、手伝いに行った。屋根のふき替え作業は、毎年行われるのではなく、数年ごとに行われていた。その時は、「屋根ふきさん」、「屋根がえさん」という職人を数名雇っていた。カセ人は職人の手伝いをするのが主な仕事であった。カセ人の中には、職人に優るとも劣らぬ技術をもっている人もいた。そういう人は職人同様の仕事をしてきた。職人には普通賃金を支払うが、カセ人には支払わないのが慣行である。しかし、その代わりに、そ

の年のお盆や年末にはお礼として、気持ちばかりの品物を贈っていたのが通例であった。

「ヤテド」とは農繁期など人手を要するときに、人手不足で自分の家だけではできないとき、人手を雇っていた。そのときは賃金を支払っていた。雇われて賃金を貰う人のことを「ヒュウトリ」（日傭取り）といった。

ヒュウトリの外に、親戚や親しい人を雇って賃金を支払わない人には、その代わりとして品物や穀物を贈った。

三、漁民の労働慣行

網の修理は、お互に近所の人々が助け合い、共同でやった。

船上げも共同でやり、船の底のカキ取りや塗料ぬりも共同でやった。

ロープ作りは、六人から七人位で協力して編った。

部分ホ分けは、船の経費（食費、油代など）を水揚げ高からさし引いて、乗子で均等に分けた。船の道具は船主が出していた。

あんこう船の場合は、船頭が二人分、他の三人の乗子が各一人分ずつ分けあった。

四、家と家族

今日、「イエ」という場合には、家屋とか、そこに住んでいる人間の集団、即ち家庭という内容を含んで

いると考えられる。そして、家の中で共同生活を営んでいるのが家族である。家族は夫婦や親子、兄弟姉妹など、愛情や血縁関係をもつ人々が、生活を共にしている集団である。家に居住している集団は、それぞれ特定の家風をもち、祖先を祀る墓地や、位牌をもち、生活するのに必要な田畑を耕作していた。そして一般的には、男系を通して、子々孫々に伝達されていくのが通例であった。家が世代を超えて末永く続いていくことが切実な願いであった。

だから時には、家族は家のために自由を犠牲にするよう、要請されることもあった。

家ではほかの家と区別するために、家紋や屋号などがあった。

そのほか家には家柄とか、格式などがあり、婚姻のときなど意識されていた。そして結婚時は、特に家柄とか、格式のつり合いがとれた家同士ということが、要望されていた。

呼び名としては、父、母のことを普通、オトツツアン、オッカアサン、トトサン、トツツアン、カカサンと呼び叔父はオツツアン、叔母はオバサンと呼んだ。兄はドン、アンジャモン、アニキ、ニイチャンなどと呼び、姉は、アネジョ、アネサン、ネエチャンなどと呼んだ。長男は、ドンバエ、二男はニバンバエ、三男は三バンバエ、末ムスコと呼び、女はムスメ、ムスメジョなどと呼んだ。末子はすそ子と呼んでいる。曾祖父は、ヒュウジイサンと呼び、曾祖母はヒュウバアサンと呼んだ。曾孫はヒュウマゴと呼んでいた。青年はワッカモンと呼んでいた。

戸主が死亡したときには、長男が財産を相続していた。この相続する者をアトトリといった。アトトリは親を養うことが条件であった。普通アトトリには長男が当たったが、男子がいない場合には、長女が養子をと

り、子のいない場合には、両方養子をとるのが慣例であった。財産は大部分を長男又は、長女が相続していた。二男以下は財産の分配を少なくするため、相続人とは別の職業につけたり、養子にやるが多かった。二、三男は分家することになるが、これをヨワカレといい、本家（ホンケ）に対し新家（シンエ）と呼んだ。

分家するには、二、三男以下で、妻帯して子どもができても仲々分家することが出来なくて、両親と長男夫婦、二男夫婦と子どもとともに、家族的に同居することもあった。

親族のことをエンカ、エンカウチ、イトコジョ、シンセキ、シンルイなどの用語が使われ、親族間において、冠婚葬祭のときは、必ず仁儀をするのが習慣となっている。

又、ラクインキョといつて、戸主権を長子に譲り、老後家の一切の世話をたのんで、のんびり暮すこともあった。

その他家族の中で、乳児、幼児が沢山いて、子育てに大へん手間がかかることを、「ミダレオシ」と形容した。

五、若者小屋（小屋）

むかしは十四、五才になれば、同年の者たちが集まり、村でも常識のある立派な人物を選んで、宿主（小屋主）を頼み、夜はその家に寝泊りして、公民としての指導を受けた。（小屋制度という）

いつごろから始まったかわからないが、腹赤天満宮前の、明治二年に建てられた職立用の石柱の上部に、

馬場床、茂三良小屋、甚右工門小屋、徳左エ門小屋と刻み、下部に小屋子と思われる三十人の人達の名が刻んである。これから見ると、明治維新前からあったものと思われるが、明治も中ごろになると、高等小学校を卒業すると、すぐ小屋（宿）入りをしたようである。

宿子は、親のいうことを聞かなくても、宿主の言葉には背かず、宿主を親同様におもい宿主は朝夕、夏冬の挨拶の仕方から行儀作法等、一人前の大人への教育をし、宿子の悩みや相談事を解決してやった。このために結婚の仲人を務めることも多かつた。夜の寝泊りは、兵隊検査のころまでであるが、その後も泊りに行く者もあつた。

大正年代になると、各村（区）に青年団が組織されたが、宿制度は変らなかつた。その後、各区に青年俱樂部ができると、宿制度がなくなり、青年団の上小屋、中小屋、下小屋となり、小学校高等科を卒業すればすぐ青年団に入団して、下小屋となり、上小屋、中小屋の人達の指導を受けたものである。

第四節 年中行事

一、正月を迎える行事

墓掃除

十二月も二十日過ぎになると、各家で墓掃除をする。特に参道や墓の周りには、海の白い砂や貝がらをまく習慣が残っている。墓にはハナンシン（クロキ）を山から切つて来て供えた。

煤すすはらい 年末になると、どの家も煤はらいをする。笹竹で箒を作り、天井などのくもの巣や、棚に積った一年間のほこりを取り除いた。

餅つき 十二月二十八日ごろになると、どの家でも餅つきを始めたが、二十九日は避けることが多かった。それは、九が苦につながるからである。

飾りつけ お供え餅の飾りつけ方は、白紙をしき、その上にウラジロをおき、三段重ねまたは二段重ねの鏡餅をのせる。ツルノハ（ユズリハ）ウラジロを餅の間にはさみ、一番上にダイダイをのせる。これは家が代々栄えるようにと祈願するためのものである。また、ツルシガキやコンブも鏡餅に添えて飾った。

門松 正月には、松、竹、梅を門前や玄関に飾る。

ぞうに箸 はしの種類は、神棚に供える大黒さん用と恵比須さん用の箸をそれぞれ一対、火鉢に使う箸が一対少し太めに作られた。その他家族用に使うはしを何組か作っていた。これは家族数よりも少し多く、お客さん用も作られた。正月の三日間はこの箸で食事をする習慣になっていた。

大晦日おおみそか 十二月三十一日は一年の総決算の日である。この日は商家へのかかけの払い、病院への支払いなど、借金を精算する日でもあった。その他用具を洗って一年の汚れを落とし、感謝の気持ちを表した。

この日の夕食はフルメシといっていつもより少し少なめに炊く。それは大晦日に飯が残れば、来年度は仕事が残るといふ言い伝えがあったからである。牛や馬、にわとり、犬、猫など家畜がいる家では、全部の家畜に米の飯を少しずつ与えたり、外、ねずみの出そうな所へも飯を置いていた。

またカボチャが残れば、全部捨てた。それは病人や災いがおこると言う言い伝えがあるからである。

年末の、丑うしの日に入浴すれば、中風にかかるとか、火事にあうといわれ、丑うしの日に当った年の三十一日の夜は入浴をさけていた。

この夜は、夜遅くまで起きて、入口の戸を半開きにしておけば、福の神がこっそりと入って来るといわれ、午前零時になればその戸を閉める。これは家に入った福の神が逃げ出さないようにするためである。

この習慣は今日でもつづけられている。

十二時をすぎると年越しソバを食べる習慣がある。旧年から新年へ年を越すときには、家族全員がそろって年を越さねばならぬといういい伝えがあった。古くは年こもりの夜は寝ない習慣があり、商家などでは、特に年越しそばを食べていた習慣が今日に伝えられているものである。

二、正月の行事

初詣 午前零時をすぎると、氏神や近郊の神社に出かける。若者だけのグループ、あるいは一家揃って出かけて、家内安全や一年間の平穩無事を祈願する。

神社では、おみき、スルメ、コンブ、カズノコなどが供えられ、参拝者はそれをいただいて帰る。神社によつては、神主さんからお払いをして貰もらったり、祝詞いわことばをあげて貰もらったりする。また、おみくじ、お守り札、破魔矢や弓、福がきなどを買って帰った。

第八章 民俗
元日の食事 元日の朝は、その家の主人または長男が水を汲くみむしきたりになっていた。これを「若水汲み」という。洗面をすましてから、神棚や仏壇に灯明をともし、今年一年の無事多幸を祈願する。

また外に出て、東西南北の萬の神を拜む習慣がある。

元日の食事は一家揃って膳につき雑煮を食べた。食膳には飾りとして、「にらみイワシ」が供えられていた。このにらみイワシを供える意味は、一年間食事について好き嫌いをしないようにという願いがこめられていた。その他、コンブ、くろ豆、つるしがき、スルメ、ウメぼしなどが、少しずつ添えられていた。コンブは一年間喜んで暮す意味があり、くろ豆は一年間「マメに働く」という意味がある。その他供えものにも諸々の願いがこめられていたものであった。

そして、新年の挨拶を交し、おみきをいただいて、食事をした。おみきをいただく順序も決っていた。戸主が最初で、長男、二男、三男の順で男が先で、女は、祖母から母親、姉、妹という順であった。

箸は、三日間は折れると縁起が悪いのでかしの木で作り、商家は栗の木で作った。この箸は、正月がすんだら、一年間神棚に供えておくところもあった。このかしの箸を使うのは、一年間かしの木のように強く雄々しく育つようにという願いがこめられてあり、商家が栗の木を使うのは資金のやりくりがいいようにという願いがこめられている。

夕食には、初めてご飯がでる。最初のご飯はいつもより多めに炊いた。それは、夕食時にご飯が残れば、その年はお金が残るといふ言い伝えがあったからである。

正月の三日間だけは、どこの家も米ご飯を炊いていた。

年始まわり 初詣がすむと、年始まわりに出かけた。地区の村役、親戚や、その他いつもお世話になっている人々を訪問して、新年の挨拶を交すのである。年始まわりは、三日間位が慣例となっていた。

初仕事 農家では二日に初仕事といって、藁^{わら}仕事をする習慣があった。当日は早起きをして、農具（馬のたずな、引緒など）を作った。初仕事をしないと一年中怠け者になるという、言い伝えがあったからである。

職人も早朝から夫々、自分の仕事を始めた。

漁師の家でも朝早くから、質のよい藁を選んで、丁寧な藁打をし、あんこう網に使う強くて丈夫な縄をつくった。

商家の仕事は、初売りをすることから始まる。朝早く起きて、初売りの準備をし、来店のお客には、お年玉を贈っていた。お年玉は特定したものではなくて、その店の商品を贈った。特に最初に買いに来た男の客には、店に飾ってあった鏡餅を贈った。

初売りのときは、男の客でなければ、戸は開けなかった。女の声のときは、戸は閉めたままだった。

旧長洲町では二日の朝は銭湯があり、特別にお金を包んでさし出す習慣があった。

その外、子どもたちも早起きして書き初めを書いた。その書き初めは一月十四日のドンドヤの時に燃やす習慣になっていた。

初寄合い 地区によって期日は異なるが、大体、一月四日から、十日位までの初旬に行なわれているのが普通である。このときは、村の組織、運営について話し合いが行われた。この年始の寄合いでは、前年の会計について決算報告がなされ、その他新年度の行事計画、ミシン（ムシン）（公役に出られないときは、その代わりお金を出す）の決定、初入りした人の紹介、ムラの役職の改選などが行われ、最後に宴会が行わ

れた。場所としては、以前は青年クラブ、ないところは区長宅であった。今日では集会所または、地区の公民館で行われている。

七日正月なぬか、十一日正月、二十日正月はつか この行事は家庭によって行われているところと、そうでないところがある。鏡餅を長方形に切つて、雑煮をつくる習慣があり、これを石塔かためといつていた。

ドンドヤ 爆竹の音や火勢を形容する、「どんど」、「どんどん」などということばの連想により、「ドンドヤ」というはやし言葉がなまって、「どんど焼き」の名称とするようになったものである。小正月の火祭り、正月十四日に行われる。左義長の行事をドンドヤと呼んでいる。現在では子どもの行事として残っている。

子どもたちは、数日前から藁や竹を集めて準備にとりかかる。場所は民家から離れた危険のない所を選び、氏神の門松を中心にして、青年たちが切り出してきた孟宗竹などで、まわりをかこみ、さらに竹や藁・うらじろ・正月の飾りつけ、お供えなどをつみあげて、準備が終わる。点火されると子どもたちは正月二日に書いた書初めを火の中へ投げ込む。燃えた灰が煙と共に空高く舞い上がると、習字が上手になるといふ。ドンドヤでは古くなった神棚やお札なども焼いた。その後、青竹にはさんだ餅を焼いて家へ持ち帰り、家族みんなで少しずつ分け合つて食べた。このドンドヤで焼いた餅を食べると、その年は病気にかからないといふ。

長洲町の海岸の町内では、早朝や夕方の方のなぎの時、砂浜でおこなつた。

馬つくれ 馬つくれは農閑期に行われた。馬や牛を飼っている農家が、獣医を招いて、牛馬の健康診断

を行い、鉄のコテを焼いて、牛馬に温灸あぶらする。その後、獣医を囲んで会食をし、酒宴を開いていた。二か月に一回の割で年六回あった。

旧正月 陰暦で行われる正月のことである。立春を正月とした習慣で、立春正月ともいう。農漁村などではずっと続いてきた。今日でも雑煮を食べて祝っている。

三、春から夏へ向けての行事

節分 立春の前日をいう。太陽暦では二月三、四日であるが、旧暦では、新暦の十二月に節分が来る年もある。節分は大寒の末日で、冬の季節が終って春の季節に移る時である。冬と春の分かれめの意味で季節の分かれめ、即ち節分という。

これは悪疫退散、招福の行事であり、豆まきをする。「福は内、鬼は外」を数回となえながら、大豆をいっただものをまいていた。その豆を各自、自分の年の数だけ拾って食べると、悪疫からのがれるという。

灸すえ 灸のことを「やいと」ともいうが、農家では、農繁期が終った後に、それぞれの地区で都合のいい時期に行われた。そのときは、成年、婦人など、夫々のグループが一か所に集まって、健康管理の灸すえを行う名目で、料理をつくり、憩いのひとときをすごした。腹赤では水神を祀って「川祭り」といった。

ひな祭り(桃の節句) 中国の上巳かみえんあるいは重三(三月三日)の行事が結局三月三日のひな祭りという形で定着した。女兒が生まれると初節句にひな人形を贈る風習がある。普通の家庭でも立派な人形が飾られるようになったのは、大正以降で、三月三日を女の節句というようになったのも、この美しい人形のおかげ

であるといわれる。

また、親戚や知人を招いてごちそうを作って酒宴を行う。その家はひな人形や羽子板を飾り、ヨモギ餅と白餅をつけて、女兒が健やかに育つよう祝うものである。

当町では四月三日に行われている。

男の節句

五月五日は端午の節句である。ヤバタ祝い、ノポリ祝いともいわれている。男児が生まれると、親戚、知人を招いてお祝いをした。ヤバタや鯉ノポリを、カド（庭先）の隅に立て、家の中には武者人形を飾った。

また、軒下には、しょうぶ、とふつ（よもぎ）を飾った。人々は体の弱いところに、しょうぶを巻きつけると、丈夫になるといふ言い伝えがある。夜はしょうぶ湯に入ると、病気にかからないといわれていた。

又、米の粉をねり、トキワやヨシの葉で包んだチマキを作って食べた。

公役 公役は必要に応じて行われていた。一日または半日出て共同作業を行うものである。家事の都合により、当日どうしても参加できない人は、「ミシン金」を出すしきりになっている。

春の農事

イデ・ヨケさらえ 苗代の前に、農家の人々が集まって、水利がよくなるように、水路の藻や障害物を取り除いたり、泥をあげたりする共同作業である。

早苗（さなえ）ポリ 別名、田の神の祭りともいわれている。これは田植えがすんだ後に、一緒に共同で田植えをした人たちが、集まって飲食を共にしていた。これは田植えが終った儀礼である。

足洗い 農家では、田植えがすんだ後、数日間休養する習慣がある。田植えが無事に終ったことに対して、慰労と感謝の意味をこめたものである。

総ごもり 農家にとっては雨が一番大切なものであった。田植えをしてから、一雨降ったときに一同が集まって飲食を共にして休養した。

雨乞い 日照りが続いたときには、神に雨を降らせてもらうように祈った。これが雨乞いである。

雨乞いの中に、雨貰いということがある。三池山の頂上の池の水を貰って来て、鎮守の神に捧げて、雨降りを祈ったり、阿蘇のすがすがしい水を貰って来るとか、その所々に色々の言い伝えがある。

永方一先宮の場合は、大分県玖珠郡の水神の水をもらい永方まで、一歩も止まることなく歩き続けて帰ったという。そのために、足に自信のある二十名近くが一団となって出発し、玉名・大津・立野・内牧にそれぞれ二―三名が待機して帰りを待ち受けりレーされた。一歩も止まることができないので、用便のときは代りの者が持つて歩き、宿で待つ者も外に見張りを立てて受け継いでいたという。昭和十五、六年ごろには赤崎を帰るころから大雨になったという話もある。(葛輪、徳永一二氏談)

雨乞いは、仮装をして三味線や、笛、太鼓を打ちならし、村々を巡って神社へ祈願に出かけた。沖洲の名石宮へは、「さあへえ、もへえ、わりやどけ行つたか、センゲシ、ハラカ、沖洲までも」という唄をくり返しながら、笛や太鼓の音に合わせ、踊り歌いながら行つたものである。

第八章 民 四王子宮へは赤づきんをかぶつて、雨乞い唄を歌いながら、(ゲンジャサンの唄)踊る「梅田の雨乞い踊り」は有名である。(後に記述する)

半夏生

夏至から数えて十一日目、七月二日ごろになる。半夏生はカラスビシャクという毒草がはえる時期の意味である。ちょうど田植えが終る時期にあたり、この日までに田植えを済ませるものとされ、天候や何かの都合でこの日まで田植えができなかった田は、植えつけるのを、あきらめるのが常であった。この日を半夏（ハゲ）といつてハゲダゴをつくった。

七夕

当地では、月遅れの八月七日に行われている。その朝は、子どもたちは朝早く起きて、里芋や蓮の葉に溜ったつゆをとり、それで墨をすり、願いごとを書いた短冊や、色紙で作った着物・袴などの飾りものを青竹につるして庭先に立てた。

四、お盆の行事

お盆は月遅れで八月十五日と十六日の二日間である。お盆が近づくと墓掃除が行われ、クロキ、シバを採つてきて墓に供えたり海岸の白砂や貝がらを墓にふつていた。初盆の家では、夕方から夜半まで提燈ちよちんを墓前にともし、親戚や故人の知己を招いて供養を行い、酒食でもてなした。

盆には遠方へ嫁いでいる人、出稼ぎや、丁稚奉公、子守り奉公に行っている人、その他働きに出ている人も里帰りをする。お盆の二日間だけは誰でも休んだが、それでも仕事をする人は「ひつちよもの盆働き」とかげ口をいわれた。

五、秋から冬への行事

八朔はつごの節句　九月一日は月遅れの八朔の節句であり、別名、田のみ実の節句という。

この日は、子どもたちは、早起きして草花を採ってきて飾り馬を作った。飾り馬は胴体の部分はナスで作
り、小さい竹を四本さして足にし、胴体の部分にはいろいろな草花をさした。その飾り馬と、七夕の笹と一
緒に川や海に流した。この飾り馬にカッパが乗って海へ流れて、次の年には川でおぼれる者がいなくなると
いわれた。昔は川でおぼれ死ぬことを、カッパに引かれるといわれていた。

秋祭り　九月から十月にかけては、各地区で五穀豊穰を祈願してそれぞれ特色ある秋祭りが行われてい
る。(祭りは別記)

彼岸ひんがしごもり　九月二十一日から二十三日の彼岸の間に、彼岸ごもりが行われた。これは祖先の霊を供養
するとともに、秋の収穫期を前にして、休養のために仕事を休み、昼すぎから各お宮に集って五穀豊穰を祈
願した。各家々では彼岸ダゴなどを作った

ひもとぎ　これは世間でいう、七・五・三である。数え年四才になった子どもこのいる家では男女それぞれ
れ晴着を新調して、氏神さんと郷社の野原八幡宮へ参拝に出かけ、子どもの無病息災、家内安全、商売繁昌
などを祈願した。



嫁入り

広がっていった。

長洲の嫁入り唄

一、親は鈍なもの、柴茶にまよて ノンシコラ

知らぬ他村に嫁にやろ。アラヨカ ノンシ ノンシ、

ホッホ ヨカヨカ、ユウナカバッテン ドウシユカイ、カンネンサイ カンネンサイ、

第五節 民俗芸能

一、長洲の嫁入り唄

当長洲町に、嫁入り唄がいつごろからうたわれ、誰によって作詩され、作曲されたかは、はっきり分からない。古老の話によれば、封建社会がととのって、家と家が重んぜられたので、結婚の場合でも、個人の自由は認められず娘は親のいいなりに嫁がされた。そこで、そうした嫁に同情して、嫁入り唄が生まれた。そして、嫁入りの行列について行く親戚、知人が、道々にこの唄を歌うようになったのである。この唄は次第に周辺へ



折地のカイカイ人形

二、以下略す。

二、折地のカイカイ人形

折地地区には、長洲町指定無形文化財として「折地カイカイ人形」がある。「カイカイ」ということは、当地の方言では、「おんぶする」「かろう」の意味である。以前から、幼児をおんぶするときは、背中を向けて「カイカイするからはよう来い」といつていた。

カイカイ人形は、古くから、この地区で行われた雨乞い踊りともいわれている。人形が人間をおんぶして踊る姿が大へん面白く、変った踊りである。それで、雨乞いや祭のときは、名石宮にこの人形が、くり出されなければならぬ不文律となつているといわれていた。県やデパート

(吉田勝義氏提供)

三、梅田の雨乞いおどり

梅田地区には、以前から民俗芸能として、「梅田の雨乞い踊り」があった。この由来については、いつごろからおこったかは、はっきり分らないが、雨乞いの文句から推測すれば、江戸時代に始まったのではな

いかと想像される。この踊りは伝統行事として、梅田地区に受けつがれていたが、終戦によって絶えてしまった。

踊りは、一戸から一人ずつ出て、そろいの赤ずきんをかぶって踊ったそうである。当時の梅田地区は、五十戸位だったので、五十人位であったと思われる。そして、梅田の「ゲンジャさん」が出なければ雨は降らないといわれた。

ゲンジャサンとは、唄の文句から推測すれば、シユゲンジャ、即ち、山伏ではなかったかといわれている。以下雨乞い唄（験者、ゲンジャサン）

・雨ば買うなら、験者雨買わばじゃなあ、

験者雨買うなら、にわかにか曇らせ、雨が降るなら、

ソーライ、また験者さんじゃ、

験者さんが、はまり込んだ。

・ゆうべ来たのは、姉さん猫ではないかなあ、

猫が白足袋、蛇目傘（からかさのこと）

二つ巴の、提灯としてもて

茶屋、下駄、などで、来るものかなあ、

以下略

（資料提供 荒尾市牛水 北田 正氏）

（ 〃 梅田 小俵あや子）

第六節、人の一生

一、出産と育児

・妊娠と俗語

妊娠したことを「オメデタ」といい、妊娠すると赤飯を炊いてお祝いをする。

妊娠している者に対し禁忌として、代表的なものは、火事を見ると生れてくる子にホヤケができたり、枕をまたぐと、もの言わぬ子が生まれる。箒をまたぐと、逆子さかごになるなどといわれた。

帯祝い 妊娠してから、五か月目のいぬの日に、帯祝いをする。帯をしめてもらう日には、産婆さん、親戚の女たちを招いてお祝いをする。

俗 産の神 子授け、安産祈願のため、氏神や宇土の粟島さん、相良あいらの観音さん参りをする。産後は、お礼

民 参りをする。

第八章 俗 出産 初子は嫁の実家で出産し、実母に手伝ってもらう。第二子以下になると、婚家で産むことになっ
ていた。

後産のことをイヤと呼び、不浄なものとして、新聞紙や油紙に包んで、畑の隅に埋めていた。ヘソの緒はハサミで切り、乾燥して年月日を記入し、紙に包み、桐箱などに入れて保管していた。

産湯には、ウブタライといって、木のタライを用いた。産衣はサラシで作ったものを着せた。

うぶめし 子供が産まれると、「ウブメシ」を炊き、茶わんに高く盛って、神棚に供えて感謝の気持ちを表していた。

出産は、産婆が主役であり、産婦の健康と育児について指導もしていた。

産後の一週間位の食事は、家族の者とは別に、お粥かゆと梅干しに、消化しやすい簡単なおかずであった。また水を飲めば体が脹れるといって、あまり飲ませなかった。

忌が晴れるまではお宮参りはできなかったが、屋内の神棚や仏壇を拝むのは、さしつかえなかった。出産から男の子は三十一日、女の子は三十三日たつと、「ヒアキ」といって、氏神にお礼詣りをした。

この日は、嫁の実母や婚家の母親が連れて、神社や親戚、祝をもらった知人などの家を訪ね、生児を披露して、おしろいを塗ってもらうなどして祝福したものである。

男の子は生後百日目、女の子は百日目に産婆を招いてモモカの祝いをした。

産まれたときに、三合さう三勺さんのアズキを入れて作った枕にねせると、頭がゆがまないという。そのアズキをモモカ祝いどきに、赤飯として食べる。これを、「オクイゾメ」という。このころから生児には離乳食を食べさせてよいことになっていた。

生児にとって初めての誕生日には、紅白の餅をつき、赤飯を炊いて、親戚に配っていた。そして、その日

までに歩いてきた子どもには、ふるしき包みに少し重いものを入れて背負わせ、歩いたところを、押し倒すようにすることもあった。これには大人になってから、こどもが、かけ落ちなどをしないようにという願いがこめられていた。また、子どもの前に、ソロバンや筆、農具やお金などを並べて、最初に手にしたもののが子どもの将来の職業となるだろうとされていた。

子守り 子守りは一般に、イイツケオビで背負うことが普通であった。農作業などで、子守りをする者がいない場合は、近くに寝かせたり、フゴに入れておいたりした。また、祖父母が子守りの係であった。その外、子守りを雇ってもらう家もあった。

二、厄年と年祝い

厄年 「厄年」というのは、災難のおこりやすい年として、慎しむ年令のことである。男は二十五才と四十二才、女は十九才と三十三才である。この年令に達すると、神社に参拝し、神のご加護を受ける厄払いの祈願をし、その年があげると厄晴れの感謝の儀式をするのが普通である。

この厄年には、一般に体力的にも変調をきたす時期であり、社会的にも、地位も確立する時期である。それで、本人の自覚をうながすためにも考えられた生活の智慧であるといわれている。

最近では、つき合いの者たち同士で、厄入り、厄晴れの酒宴を開いている。

年祝い 数え年六十一才の還暦、七十才の古稀、七十七才の喜寿、八十八才の米寿、九十九才の白寿などがある。還暦祝いをホンケガエリという。子どもたちみんな、赤布で肌着や、袖なしを作って祝ってや

る。この年になれば、肉体的にも老年期の境にあり、社会的にも隠居の年令として、この年を特に重く祝うようになっている。

三、婚 姻

婚姻は、この地方では足入婚が一般的であった。婿入りを婚礼の祝儀以前にする方法と、結婚式の当日、嫁の出立ちの祝いに行う方法との二通りがある。これらの二つの方法は、双方の家で相談の上、どちらの方法がとられていた。

結婚の条件 配偶者の決定には、親が主導権を握っていた。親戚や知人、友人に頼んで、適当な人を探してもらう。家柄や格式については、厳しく条件をつけることが多かった。

農家では健康で働き者が望まれていた。

婚姻年令 一般に男女ともに、二十才を過ぎると、適令期とされていた。戦前には兵役があったので、男はそれを過ぎてから、嫁をもらうのが普通であった。即ち、二十五才から三十才位までに嫁をもらうのが普通であり、女の場合は二十五才位までが適令期とされていた。男女ともに、三十才をすぎると、オジヤンとかオバヤンとかいって冷笑された。

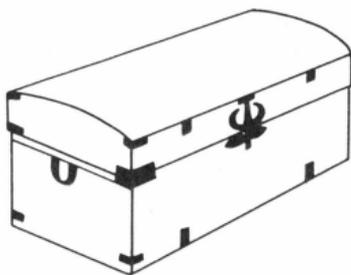
仲人 めばしい候補者が見つかる、顔役などに頼みに行くことが多かった。

仲人のことを「ナカダチドン」といい、交渉のすべて、口利きから、祝儀まで、双方の意見をもとに仲に立って、そのまとも役をつとめてもらうことにした。今日におけるような恋愛は稀であった。

[タンス]



[ナガモチ]



嫁入り道具 { 上・タンス
下・ナガモチ

口聞き 仲人の何回かの口利きの結果、無事に嫁の親の承諾が得られたら、キメ酒を入れる。いわゆる婚姻が成立したことになるのである。酒一升に鯛を一匹持って行くのが普通であった。そして、その場で、嫁の両親と簡単な内祝いをする。

承諾が得られると、大安吉日を選んで、決り茶と酒樽が贈られる。キメ樽は両方に角のような柄がついているので、ツノダルともいう。

樽開き（足入婚）は実質的な結婚式であった。

結納返しは、嫁入りするとき、反物、茶、本ダルなどの酒樽が婿方に手渡される。

婿入りの祝宴の座席の順は、上座に嫁、婿が並んで坐り、両親に仲人夫婦、両親の順に分れて坐るものである。親戚代表のオジ、オバは、嫁方、婿方双方の側に並んで坐る。この日は、嫁方が婿方を招待した形に

なるので、祝宴の挨拶は、嫁方の御亭主（オテッサン）がする。この日は、婿は嫁の家に泊って帰るのが普通であった。

道具送り 道具はタンス、ナガモチに

タライ、手水タライ、その他日用品が普通

であった。道具は、馬車などを使って、前

日、または、当日に送られていた。婿方

は、途中まで出迎えて受取るのが普通であ

った。

嫁入り、(結婚式)

嫁入りは、夕方から夜にかけて行われるのが普通であった。昼間、嫁方では、出たちの祝いをした。婿方からは、嫁もらいの名目で、仲人夫婦が出席していた。座順は嫁を中心に、ツレオナゴ(嫁と同じ年令位で、未婚の女性で盛装する花嫁の介添役である)がそばにつき、仲人夫婦が両脇に分かれて坐る。婿の方の親戚は出席しない。嫁方の親戚で血筋の近い順に、下座にかけて並んで坐る。

出立ちの祝いを済ませると、嫁は仏壇を拝み、両親、その他の人々に挨拶をし、ツレオナゴに手を引かれて敷居をまたいで家を出て、嫁入り唄に送られて婿方の家へ行く。

婿方に着いたら、嫁はオモテから、仏間に通されて仏壇を拝む。三三九度の杯は、へやで嫁、婿、ツレオナゴ、仲人夫妻が坐り、両親のいる子どもの酌とする。順序は、嫁、婿、嫁、仲人、ツレオナゴで終る。

三三九度の杯が済むと、披露宴が行われる。嫁方からは、嫁の親戚、ツレオナゴ、嫁の友人、その他知人などと、婿方との親戚の間で酒宴が行われる。酒宴は夜半まで続けられ、翌日あるいは二三日も続くこともあった。

里帰り 嫁入りをしてから、一週間以内に、里帰りをするのが普通であった。そのときは紅白の餅を土産として持ち帰り、近所に挨拶回りをして配っていた。

初正月 嫁入りをしてから、初めての正月には、婿と一緒に里帰りをする。大きな三段重ねの鏡餅と、ブリを持参していた。

仲人への贈りもの 仲人にはお礼として、婿方と嫁方とが相談して、金品のお礼をしていた。また、初

めての正月には、ブリ一匹と鏡餅を贈る習慣があった。次の年からは、数年間、品物を贈っていた。この習慣は今日も尚、続けられている。

四、葬式と墓制

たよりつけ 死者が出ると、屋敷内やしきうちの者が親戚に知らせる。近くの家から、次々と伝えられて地区全体に伝って行く。地区の人々は、それぞれクヤミにやって来る。

ヤシクチ（近所の集団のこと）の中で、長老や世話の届く人が中心となり、葬式の世話をする。

死者の処置 死者は仏壇のある部屋にねかされ、北枕、西向きにする。顔の上には白布をかぶせ、死者のそばに刃物をおいて、僧侶を待つ。白米を炊いて山盛りに茶碗に盛り合わせる。線香を一本、白花を一本供えておく。猫は別室に監禁する。猫が死者をまたぐと、死者がおき上がるという俗信があった。

葬式組 死者が出たヤシクチは、各戸から一人ずつ出て、葬式の準備をする。その組の長老や世話の届く人が中心となって、喪主と相談のうえ、葬式の役割分担を決める。それから、造花や葬儀の買物の世話をする。また、くやみとして米や、無情講として一定額のお金を、全戸から集めていた。

通夜 ヨトギともいう。神棚や額縁などは、白紙でふさぎ、枕元には、びょうぶを逆に立てる。

分家した者や、喪主と身近かな者は、米一俵ぐらいを供え、その米俵には、さし出し人の名前を記入して枕元に供えておく。枕飯は茶碗一杯に盛っておく。（茶碗は出棺のとき門口でたたき割った）。線香をあげ、僧侶の枕経があげられる間に、ムラの人たちが、クヤミに集って夜明かしをする。ヨトギに来た人には、ヤ

シクチの人たちが炊き出しをする。

墓掘り 昔は伝染病以外は、殆ど土葬であった。そのためには墓掘りが必要である。墓掘りは地区を数組に分けて、死者の出た以外の組の人々が掘る仕組になっていた。旧長洲町では若者組が喪主の指示した場所に掘っていた。自分の家の墓の北側には掘らないようにしていた。北側に埋葬すれば、死者が次々にキタというように、縁起をかついでいたからである。また、墓には松は植えないようにしていた。これも、松を植えれば、死者をマツというように、死者が続出することを嫌って、縁起をかついだものである。

入棺 入棺は、死者の兄弟や、子ども、身近かな者がする。タライに水を入れ、その後お湯を入れ、死体の全部を洗った。使ったお湯は床の下に捨てた。その後白布で作った経帷きんゑいを左前に着せ、手に数珠じゆずを持たせ、合掌させる。頭髮は剃り、三角頭巾を巻いてやる。こうして死者の服装を整えると、納棺になる。棺には、死者を西向きに置くために、前と書いた紙をはりつけた。棺の中には枕飯や、死者が生前に愛好していた品々を入れた。

葬式 葬式は、できる限り、トモビキの日はさけた。止むを得ずにする場合には、ワラ人形を一緒に入れて行った。棺は仏壇のある部屋におかれ、花模様色のついた菓子や、果物、米の粉で作ったオゴサンダゴが、四十九個供えられた。準備された道燈籠ちやうとうろうに火がともされる。僧侶の読経の中で焼香がはじまる。焼香は男だけが前にでて行い、女は回し焼香まわしやうかうだけで正式の焼香はしなかった。棺に蓋がされ、たて結びに結ばれる。親族代表のお礼の挨拶があり、棺は縁側から出される。

出棺 枕飯をついでいた茶碗は出棺のときにたたき割られ、屋敷を出るまでは、血縁者だけで担ぐこと

が多かった。門口を出ると葬式組の人たちが、葬列を組んで野辺送りをする。

葬列は、先頭に白張り提燈（ましろちん）をもち、続いて青竹の先にローソクをつけた（六道）とよばれる簡単な燈籠（とうろう）を持った人々が、墓までの道順に従って角々にそれを立てていく。その後には、花、棺、家族の者、参列者の順に続いていく。

葬式の服装は男は紋付はかまの正装で、女は綿帽子をかぶった。はき物はぞうりをはき、帰りには、そのぞうりを墓において来た。

埋葬 棺が到着すると、僧侶の穴経があげられた後、墓穴に入れられる。そのとき逆竹（さかたけ）を中心立てる。血縁者は左廻りを三回しながら左ぐわで土を入れ土盛りをして墓標を立てる。埋葬の葬式の帰りは、来た道とは異った道を通った。

オトギ 葬式に参加した人々には、オトギが出される。オトギは死者との別れの宴であり、精進料理で、酒も出される。

墓制 墓まるめ、埋葬後の三日目はハカマルメをする。

法事 葬式後は、初七日と四十九日、百か日は、親戚などを招き、精進料理で接待し供養する。それが済むと、生魚（なまな）も食べてよいとされている。

一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十五年忌、三十三年忌とある。その年忌には、僧侶にお経をあげてもらい、法事をする。そのときは、ラクガンの引き出物を配っていた。

五十年忌には、最後として、特に三部経をあげてもらうのが普通であった。

その他

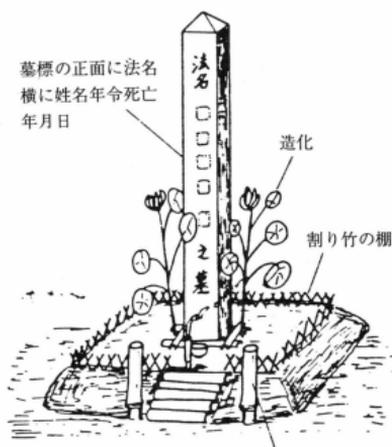
死の忌としては、家族の者が死んでから、四十九日間は、神社の境内に入ったり、他の神々にも参拝してはならないとされていた。また、それまでは、精進料理として、魚や肉を食べたり、生きものを捕らえて、殺してはならないといわれていた。それを守らないと、不幸が続くものと、言い伝えられていた。祥月命日しょうつきには精進をした。

- ・ 話協力者 中西三香さん 村上秀子さん
- ・ 参考資料

- ・ 玉名の民俗、高木誠治氏
- ・ 八代の民俗、名和康長氏 奥野広隆氏

〔墓マルメ〕

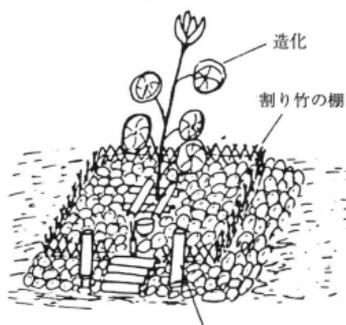
その1



49日過ぎて生花をあげる

〔墓マルメ〕

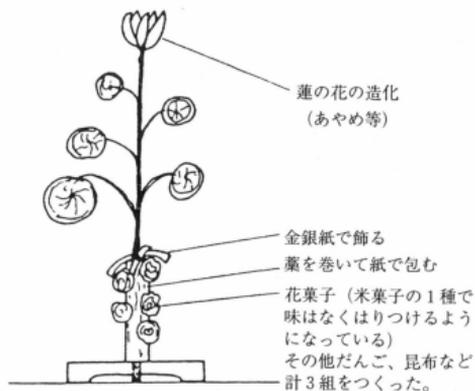
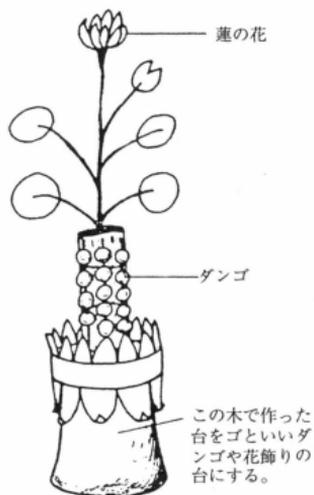
その2



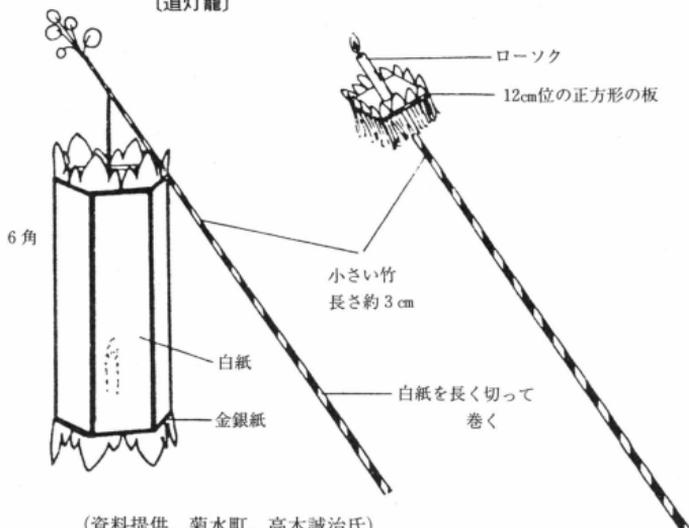
49日過ぎて生花をあげる

(資料提供、菊水町高木誠治氏)

〔葬式用の花飾り〕



〔道灯籠〕



(資料提供、菊水町、高木誠治氏)

第七節 長洲むかしのあそび

最近では子どもたちの遊びも、サッカー、バレーボール、ソフトボールなど、スポーツ化してきた。そのせいか、昔から伝統的に、親から子へ、子から孫へと伝えられた地域特有の遊びが、なくなりつつある。

そこで、当長洲町に昔から、言い伝えられ、受けつがれてきた「むかしのあそび」を記述してみる。

一、室内のあそび

- とんきん
 - こつくりさん
 - 松葉あそび
 - さとうきび
 - はまぐりの笛
 - 蜂がさした
 - あやとり
 - ほおずき
 - 紙てっぽう
 - おはじき
 - どんくりごま
 - つばな倒し
 - ままんこ
 - らつかさんあそび
 - 草花あそび
 - 梅しゃぶり
 - わらかごづくり
- 二、外でのあそび
- でんがら
 - かまくら
 - 川中島
 - 海軍ゆうぎ

- ・手まり
- ・ジガジガいくつ
- ・輪ゴムとり
- ・石けり大正
- ・缶けり
- ・馬けり
- ・かわらたおし
- ・だんかけ
- ・榎の実でつぼう
- ・箱庭づくり
- ・ポックリ
- ・その外、「七夕の祝歌」もあつた。
- ・ゴム跳び
- ・しゅっせいかいせん
- ・陣とり
- ・おしくらまんじゆ
- ・かくれんぼ
- ・かげふみ
- ・ちよんかけ
- ・山こぶのけんか
- ・どんぐりごま
- ・竹とんぼ
- ・糸まき車
- ・花いちもんめ
- ・ラムネン玉
- ・やりおん
- ・羽根つき
- ・島とり
- ・インド人のクロンボ
- ・ピンポン
- ・馬のり
- ・ボール当て
- ・でんでん虫
- ・こま
- ・うさぎ狩りあそび
- ・だんつり
- ・柳の刀でチャンバラごっこ
- ・笹舟
- ・自転車の輪まわし
- ・ぬつか小屋

資料 長洲中央児童館、「長洲むかしのあそび」より

三、唄

・かぞえ唄

- 一、一列談判、破れつして
- 二、にちろ戦争が始つた
- 三、さつさと逃げるは、ロシアの兵
- 四、死んでも尽すは日本の兵
- 五、五万の兵を引きつれて
- 六、六人残して皆殺し
- 七、七月八日の戦いで
- 八、ハルピンまでも攻め入つて
- 九、クロバトキンメイ、降参し
- 十、東郷元師、バンバンザイ

数え唄に合わせて、とんきんをしていた。当時は、軍国主義はなやかな時代であり、軍歌が大へん流行した。



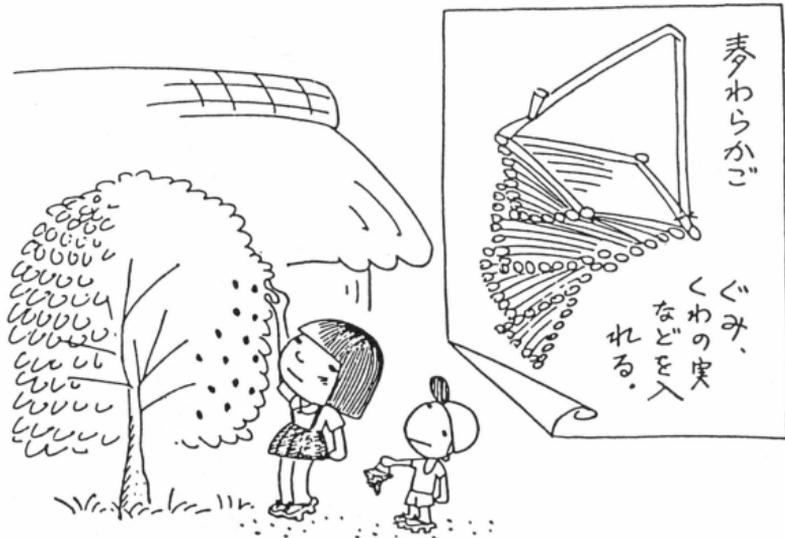
麦刈りのあと、穂を落とした麦わらを編んでかごを作り、それを、ぐみや、くわの実、そら豆等の入れものにした。

わらかごづくり

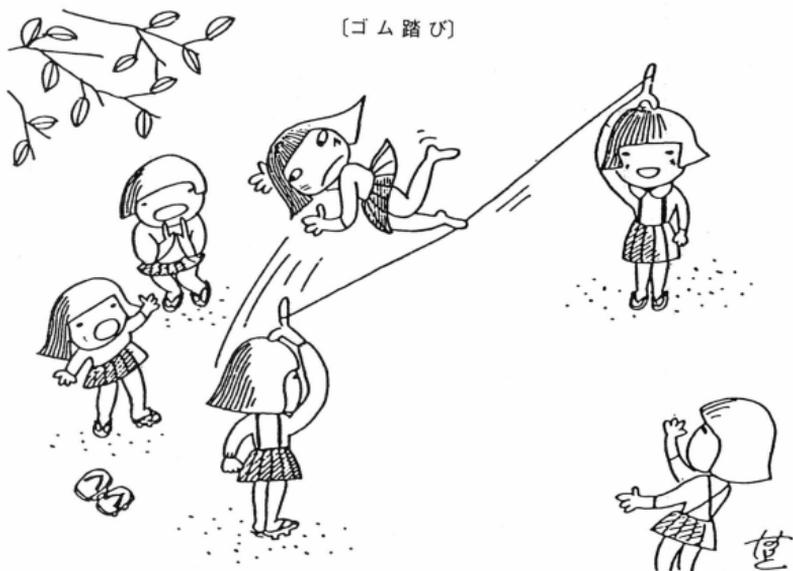
おなべ

ひじ上のところまでそでを上げて、一人が手首から両手親指で「おなべ」「おなべ」…を繰り返しながらひじの位置まで押さえていき、占いをする。

「お」は、おりこうさん、「な」は、なげべす（なきむし）、「べ」は勉強家。

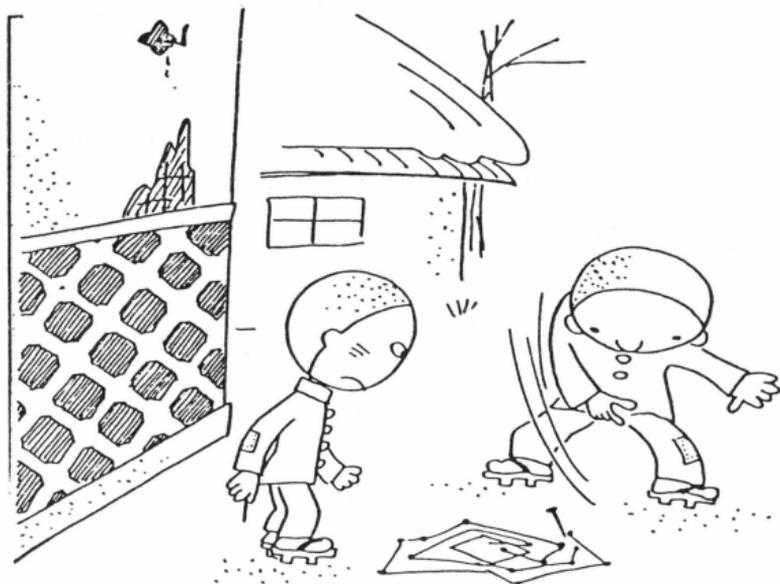


[ゴム踏び]



[馬のり]





釘 ぬ き

五寸釘を使って二人であそぶ。

釘のさゝる位のやわらかい地面に、一辺十センチ位の四角を描き、ジャンケンで勝った人が先に四角の中に釘を投げ立てる。

次は、その四角をとりかこむように投げ立て、線で結ぶ。

倒れたら相手と交替する。

なお、相手にとりかわられてしまい、自分の投げ立てた釘の線が相手の線で引けない時は、負けになる。

七夕祝唄

一つでは父にはなれて
二つで母にはなれた
三つでは、姉に負われて
四つで世の中さらされた
五つでは糸のよりぞめ
六つで小くだの巻きぞめ
七つではあやを織らせて
八つできんらんたてらいた
九つで、筆どりぞめして
十で天じくあがらいた

天じく天の姉のかたから
木綿三反もらわいた

くよ／＼くよ花
染めもんなやすいもんで
なんの模様をつけてやろ
片袖は鶴亀はわせて
また片袖はてんで箱
てんで箱あけて見たれば
えんかい七夕寝てござる
えんかいさん七夕さん
せみの羽根ンごてつがせて
織らせてくれなはる
たのんまっしゅ

七夕は年に一度の七夕

資料提供（塩山正徳）

・アーサム コサム
アーサムか、コーサムか
コーヨムどんかた、行ったら
ダゴ汁たあて、くわせらした
マッ一丁食うてち、言うたら
スリコギ持って、追おうわした

（池田三次氏提供）